

学位論文審査結果の要旨

学位申請者 氏名	馬 麗娜
審査委員	主査 鹿児島大学 教授 豊 智行
	副査 鹿児島大学 教授 李 哉滋
	副査 琉球大学 教授 杉村 泰彦
	副査 琉球大学 教授 内藤 重之
	副査 鹿児島大学 准教授 坂井 教郎
審査協力者	
題 目	中国における資源循環型農業システムの実態と持続性に関する研究・ (Studies on the Actual State and Sustainability of Resource Circulation Type Agriculture System in China)
<p>中国では、2008年にその年の最も重要な政策を示す中央一号文書の「社会主義新農村の建設についての意見」で資源循環型農業という用語が取り上げられ、以降、資源循環型農業システムの構築とその発展に必要な技術や政策方針が重要視されている。しかしながら、構築するシステムをどのように持続させるかという点には注意が払われていない。本研究は、農業や食品産業から生じる副産物を生産資材として循環利用する農業を資源循環型農業、そして、それらの副産物の取引関係にある主体によって構成されるシステム、または、それらの副産物を農業経営内の部門間で相互に利用するシステムを資源循環型農業システムと定義し、中国における資源循環型農業システムの実態を把握し、その持続性を検討することを課題とした。</p> <p>この課題に応じるために、資源循環型農業に持続して取り組んでいる珠江デルタ地域の家禽・果樹の複合経営農家、トウモロコシの主要産地で牛の飼養の多い河北省におけるトウモロコシ農家・牛農家・トウモロコシを原料とする食品加工業者によって構成されるシステム、トウモロコシ農家・乳牛専業会社・ツクリタ</p>	

ケ農業合作社・無公害野菜專業合作社・メタンガスセンター・堆肥センター・肥料会社によって構成されるシステム等の事例を取り上げた。そこでの各主体の長期的経営動態、経営内部部門間での副産物の相互利用の実態、そして、システムを構成する各主体間の副産物市場の構造・行動を調査分析し、主要な解明点は以下の通りである。

経営内部における副産物の生産資材としての利用により、それに代替効果のある生産資材を外部から購入する必要がない、または、代替効果のある外部からの購入資材がある場合もその価格上昇による大幅な費用増加を主産物増産による副産物増加によって回避する経営がされている。

資源循環型農業システムを構成する主体から生じる副産物の取引においては、システム内で全ての副産物が移転し、有効利用されるように需要者の支払い能力に応じた価格が設定されている。供給者がごく少数で需要者が多数の供給者が価格支配力を発揮可能と考えられる副産物の市場も存在するが、そこでもこのような価格設定となっている。

資源循環型農業システムの構築という目的をシステムの構成主体が共有しているために、その主体間の副産物の取引費用は、システム外の主体との取引より低くなっている。また、各主体は近接して立地しており、相互の状況把握を繰り返して行っている。それを通して、各主体間に信頼関係が醸成されているため、良好な取引を生み出す状況にある。そのようなことから、副産物を継続的に取引する協調関係が形成されている。

資源循環型農業システムの各構成主体の経営への副産物項目の収入・支出の影響には差異があるものの、概して小さく、副産物の取引が各構成主体の持続、ひいてはシステムの持続の阻害要因にはなっていない。

本研究の成果は、中国における持続的な資源循環型農業システム形成の諸条件を克明な現地調査と細かな時系列経営データの収集を踏まえた分析から提示しており、中国における資源循環型農業システムの構築と改善に有益な示唆を与えるものである。したがって、本論文は博士の学位論文（農学）として十分な価値を有するものと判断した。